コラム 時代に向き合う 地域コミュニティづくり

福岡県まちづくり専門家　㈱アーバンデザインコンサルタント取締役　十　時　　裕

平成19年、福岡県は「地域コミュニティ活性化研究会」を設置し、県内のコミュニティの調査、研究に着手した。研究会委員へのお誘いがあった時、私は地方自治の根幹、自治体固有の政策と言える地域コミュニティに県が関わることへ疑問を抱きつつ委員をお受けした。

研究会による報告書作成および提言終了後、3年間にわたり県市町村支援課と共に自治体職員や地域活動実践者を対象にした研修会、交流会等の運営に関わることになり、県内自治体それぞれの取り組み、悩みを共有し、考える場に関わる機会を得た。

この研修会による情報・意見交換の場は、回を重ねるごとに県内各地の自治体のコミュニティ政策への取り組みの拡がりを実感できる貴重な体験であった。

研修会を始めた当初、自治体間のコミュニティ政策はまちまちで、参加者が共有する課題も、共通する言葉も少なく、意見交換にしてもぎこちなさがあった。年を追うごとに各自治体の関心も高まり、共通の課題を持ち寄り、実践的な話し合いができる環境が生まれてきた。

こうした県内自治体の取り組みの過程や動きを振り返って見ると、どの自治体もコミュニティ政策に新たに取り組む上で、必ず突き当たる課題や解決すべき点があるように思える。

最初の課題は、地域コミュニティの単位とその領域である。コミュニティ政策を新たに考える時、主に校区コミュニティを模索する傾向にあるが、その際、現在の自治区（自治会、町内会）を束ねて校区に拡げた単位での新たな活動の必要性や妥当性への説明が求められる。2つ目は、現行の地域活動と新たなコミュニティ活動との関連性、連続性である。これら2つの課題は、どちらも既存の団体や組織システムと、新しい取り組みとの調整、すり合わせである。

そのため、新しいコミュニティ政策への取り組みは現行の活動や組織に対して、制度変化や改革につながるものと捉えられ、「何故コミュニティなのか?」のそもそも論を問われることになる。

地域は長年続いてきた組織や活動を既に持ち、自負・誇りを持っている。これまでの地域のしくみやあり方を見直していく新しい制度の提案や改革と捉えられるからこそ、「何故コミュニティか?」への説明責任は必ず通らねばならない関門といえる。

「参加、参画」、「協働」、「新しい公共」は、行政政策としてだけではなく、社会全体で取り組むべき課題となった。新たなコミュニティ政策は、これからの時代に求められる課題解決につながる住民自治の姿、形であることを踏まえ、「コミュニティの必要性と意義」をわかりやすく住民に理解してもらわなければならない。地域に合った新しいコミュニティを定着させていくためには、まずは地域で対話し、納得できたものからチャレンジし、その成功体験をより多くの仲間で繰り返し共感することから始まる。

コミュニティの取り組みに正解はない。自治体や地域の特性に合わせた独自のシナリオを描いていくには、県を窓口に行ってきた自治体研修会のような様々な体験をもつ自治体とコミュニティが情報共有や交換を行い、協働から自治につながる理論や技術を互いに学び、競い合い、豊かな社会、まちづくりにつなげていく取り組みが必要である。

著者プロフィール

十（と）　時（とき）　　裕（ひろし）

福岡県出身。市民主体のまちづくりを米国で学び、帰国後、福岡を拠点に都市計画、まちづくりに携わる。地元で自らも自治会長を務め、参加、参画型の話し合い（ワークショップ）を活用して住民自治を目指すコミュニティデザインを提案・支援する活動を行っている。

福岡県

きずな

No.1

平成24年9月 発行

～福岡県の地域コミュニティ情報誌～

編集・発行 福岡県企画・地域振興部市町村支援課　〒812-8577 福岡市博多区東公園7−7
TEL 092 (643) 3072　FAX 092 (643) 3078

歴史・文化がつなぐ地域のきずな

～赤間地区コミュニティ運営協議会（宗像市）～

宗像市にあるJR鹿児島本線「教育大前駅」。唐津街道赤間宿の玄関口です。江戸時代には、参勤交代のために整備された唐津街道の宿場町としてにぎわい、幕末期には三条実美ら多くの要人が訪れました。閑静な町並みの中には、当時をしのばせる古民家や井戸の跡などが数多く残っています。

この赤間地区で様々な地域コミュニティ活動に取り組んでいるのが「赤間地区コミュニティ運営協議会」です。

宗像市では、少子高齢化による担い手不足や核家族化・都市化により地域のつながりが希薄になってきたこと、住民ニーズの多様化などの理由で、自治会だけでは対応できない課題が生じるようになりました。このような課題に対応するため、小学校区単位で地区住民による自主組織が設立され、各校区において様々な取組が行われています。

この小学校区単位の自主組織の一つが赤間地区コミュニティ運営協議会です。赤間地区では、毎年2月に開催される「赤間宿まつり」や赤間宿を案内するボランティアガイドなど赤間宿に関連する様々な取組を行っています。

このように、地域の歴史を大切にしながら、地域コミュニティの活性化に取り組んでいる赤間地区コミュニティ運営協議会について取材しました。

多くの人々でにぎわう赤間宿まつり

地域の方々が集うコミュニティ・センター

「外から見るまつり」から「自分たちが参加するまつり」へ

赤間地区での取組の中でも特に大きなものが赤間宿まつりです。駅前の赤間本町通りを会場に毎年2月に開催されます。

赤間宿まつりは、約20年前から実施されていますが、当初は地元商工会が主催しており、地域との関わりはあまりなかったそうです。現在のように地域の方々が関わるようになったのは平成14年頃から。商工会に加え、地域への広がりをとの思いから、区長会が運営に関わるようになりました。その後、平成16年に赤間地区コミュニティ運営協議会が設立され、平成18年からは運営協議会が赤間宿まつりを主催しています。

「コミュニティでまつりを主催するようになって、地域の方々が多く集まるようになりました。」そう語るのは運営協議会事務局長の太田繁勝さん。昨年度のまつりでは、江戸時代の人々の姿を再現する仮装行列を企画。地域の方々から100着以上の衣装が寄贈され、当日は、コミュニティ・センターで実施している着付け教室のメンバーが準備に協力してくれたそうです。このように、住民が主体的に参加することで、「自分たちのまつり」という思いが強くなっているそうです。

「歴史」がつなぐ地域と学校

赤間宿まつりでは、三軒の古民家を開放しており、自由に見学することができます。見学者を案内するのは地元の小学生。運営協議会のボランティアガイドから指導を受け、赤間宿まつり限定でガイドに挑戦します。この取組が見学者に大変好評なのだそうです。

赤間宿の古民家

ボランティアガイドについて語っていただいたのは、ボランティアガイド代表の伊豆幸次さん。その始まりは運営協議会の設立がきっかけ。運営協議会に設置された地域づくり部会で、赤間宿の歴史を学ぶ勉強会が行われ、現在は10名の方がボランティアガイドとして登録されているそうです。

赤間宿まつりの小学生ボランティアガイド

赤間地区でこのような取組を行っていたところ、赤間小学校から、「授業の一環で地元の歴史を学びたい」という相談があり、ボランティアガイドが6年生を対象に赤間宿の歴史についての授業を行いました。これをきっかけに小学生ボランティアガイドの話が持ち上がり、毎年6年生から希望者を募って実施しているそうです。

「歴史・文化」が地域の共通項

赤間地区コミュニティ運営協議会の取組で、赤間宿まつりに並ぶ大きなイベントが「コミュニティ文化祭」です。毎年9月にコミュニティ・センターで開催され、センターで実施されている様々なカルチャー教室の発表の場にもなっています。

「赤間地区は旧来からの住民と新住民が混在する宗像市の縮図」そう語るのは、運営協議会会長の前田誠さん。宗像市は昭和50年頃からベッドタウンとして住宅地の開発が進み、現在では、農村と新興住宅地が混在する地域になっています。その中でも、赤間地区は農村地域の自治区、新興住宅地の自治区がそれぞれ半数ずつで、その特徴が顕著に表れています。

旧住民と新住民の融和を図るためには共通項が必要。その共通項が歴史であり、文化であると協議会会長の前田さんと事務局長の太田さんは口を揃えます。

赤間地区では、これまで紹介してきた取組以外にも、児童の宿泊研修や健康測定会、河川の清掃活動や各種講演会など様々な活動が行われています。赤間宿まつりやコミュニティ文化祭などの行事を通じて育まれた地域の和が赤間地区の活発な地域コミュニティ活動の原動力となっているようです。

みやま市は、平成19年1月に旧山門郡瀬高町、山川町、旧三池郡高田町が合併して誕生しました。南校区まちづくり協議会は、旧瀬高町・南小学校区の地域コミュニティ組織です。今回は南校区で実施されている「みなみ子ども広場」の取組を紹介します。

「みなみ子ども広場」では、毎週土曜日に地域のボランティアが講師となり、農業体験や料理教室など様々な取組を実施しています。取材に訪れた6月30日にはさつま芋の苗植えが行われました。

この日は朝から雨模様でしたが、集合場所の農村環境改善センターには29人の子どもたちが集まりました。

元気に苗を植える子どもたち

ボランティアの方の指導の下、約400本の芋苗を植えました。畑は朝からの雨の影響でぬかるんでいましたが、子どもたちにとっては、絶好の泥遊びの場になったようです。最後はみんな裸足になって走り回っていました。

植え付けの後は、みなみの会、JA女性部や食生活改善推進会の方々が準備したおにぎりをほおばり、楽しい時間を過ごしました。秋には収穫祭を行い、収穫した芋を子どもたちで調理し、地域の方々への販売も考えているとのこと。みんなで植えた芋がどう育つか、これからのお楽しみです。

おにぎり、ごちそうさまです！

「無理なく、できることから」

取組のきっかけは平成14年の学校完全週5日制の導入。土曜日に仕事がある保護者もいる中で、地域で子どもたちの居場所をつくることはできないか。そのような思いから、当時の南校区公民館長が各団体に呼びかけ、会合がもたれました。

当時の様子をお話いただいたのは「みなみ子ども広場」実行委員会副会長の河野典子さん。「最初のうちは、何か言い出すと自分がやらなければならないのではないか、負担になりはしないかという心配もありましたが、『とにかく無理のない範囲でできることをやりましょう』ということで意見を求めたところ、『私は囲碁なら』、『私は料理なら』という話が出てきたので、1日だけ開催することになりました。」当日は囲碁将棋教室、料理教室、昔あそび教室などを行い、50人くらいの子どもたちが参加したそうです。

この取組が子どもたちに好評だったので、今後も実施しようという声があがり、年々開催日数が増え、今では年間40日以上開催されています。

「みなみ子ども広場」から広がる「人と人とのつながり」

南校区では、子ども広場の取組を始める前から「さざんか学級」という大人向けの趣味の講座が行われており、囲碁や押し花など様々な講座を通じて、地域の方々がつながっていました。

南校区まちづくり協議会会長の紫牟田一彦さんによると、さざんか学級で学んだ趣味を生かして、子ども広場のボランティアに参加されている方もいて、この取組を通じてさらに地域の方々のつながりが広がっているそうです。

少子化による児童数の減少など課題もあるとのことですが、昔からの地域のつながり、子ども広場を通じて広がった地域のつながりがこれからも南校区を支えていくのではないでしょうか。